日本最初の「透明人間」漫画本
――槇尾赤霧、自来也とともに――

中前正志

槇尾赤霧補足少々

本誌前号所載の拙稿「『透明人間』の誕生とその前後――九十周年に寄せる覚書――」（以下、「前稿」）において、昭和三年（一九二八）の中編小説『透明の人間』（『キング』四‐一〇・一一、昭和三年十・十一月）など、槇尾赤霧（一八九五～一九八〇）の作品に触れておいた。本題に入る前にまずは、その槇尾赤霧の、透明人間との関わりについて、若干の補足をしておきたいと思う。

槇尾は、『透明の人間』発表時には、早稲田大学電気工学科を卒業し、逓信省にて技官として働いていたのだが（後出『透明人間大パーティ』など参照）、その前年の昭和二年の三月一日にも、ラヂオ研究雑誌『無線電話』第四巻第三号に、『或る科学者の清談』と題する作品を発表している。前稿以降に知り得たもので、四百字詰原稿用紙にして二十枚程度の短編である。また、「大衆科学文芸」と銘打ってあり、それについては、海野十三が『地球盗難』（ラヂオ科学社、昭和十二年）に付載した「『地球盗難』の作者の言葉」（『海野十三全集』別巻1）の中で、「昭和二年『無線電話』

という雑誌に自ら主唱し、友人槇尾赤霧と早苗千秋とに協力を求めて、三人して『科学大衆文芸』というものを興した」と述べるのに、該当するものであるに違いない。

「共に大学の工科を同年度に出た」「素人文学者」である、多和田・田中・佐分利・牧野という四人の男が、「連作についての会合」をした際に、「何でもよいから其の先陣をやれ」と言われて、まず牧野が語ったことが、『或る科学者の清談』の中央部を占め、全体の三分の二以上の分量に及んでいる。そして、その牧野の話が、H・G・ウェルズの著名なSF作品『*The Invisible Man*』（『透明人間』）の一場面の翻訳そのままになっているのである（ただし、完全な翻訳というわけではない部分もある）。翻訳されたのは、自ら開発した薬によって透明人間となったグリフィンが、学生時代に同学年であった科学者のケンプのもとを訪れる、という場面である。『透明の人間』は、それを収載する鮎川哲也編『透明人間大パーティ』（講談社文庫、昭和六十年）も解説する通り、右ウェルズ作品の翻案模倣作というべきものになっているが、同作品の前年にも、その前段階とも位置付け得るような、右の如き内容の短編『或る科学者の清談』を発表していたのである。そのことはまた、槇尾のウェルズ作品に対する当時の関心の深さを、より強く窺わせもするだろう。

『透明人間大パーティ』の解説は、『透明の人間』について、

> H・G・ウェルズの『透明人間』を原書で読んでSF作家ウェルズの着想の妙に感服し、押川春浪以来絶えて科学小説に接することのなかった日本の読者に、なんとか紹介したいという発想から執筆されたものではないか、とわたしは想像している。

と述べている。ここに示された「想像」は、右のような『或る科学者の清談』が前年に発表されてもいたことに加えて、さらには槇尾自身が次の通り記述している点も踏まえると、かなりの程度裏付けられることになるだろう。大正十四年

（一九二五）刊行の槇尾の著書『面白い科学の話』（早稲田大学出版部）の序文の冒頭に、

私のもとにとゞく種々の外国の本、雑誌等を読みまして面白い奇抜だと思ふおりふしに書き集めましたこれ等の記事には、多少の彩と誇張とはあると感じますものゝ、其真髄をうつす事には少しのくるひを見ません。

と見える。槇尾のもとには外国の本や雑誌が種々届いていて、その中にあったウェルズ作品を読み「面白い奇抜だ」と思ったことが、その場面の翻訳を中央部に据える『或る科学者の清談』へと繋がるとともに、日本の読者に向けた、日本を舞台とし青年科学者の高木功を主人公とする、ウェルズ作品の翻案模倣作『透明の人間』の創作へと向かわせたのであろう。

『或る科学者の清談』に登場する四人の男が「大学の工科を」「出た」「素人文学者」であるというのは、槇尾自身を投影した設定であるに違いなかろう。牧野がウェルズ作品の一場面をほぼそのまま翻訳して披露した、その直後には

こゝで牧野は話を一先うちきつて、多和田、田中、佐分利の面々を見た。自満そうに見た。

『先づこんな物さ、この後をひきつぐ奴を今晩きめやうじやないか。』

と、自らが語った構想に対して自信を示す牧野が描かれるとともに、作品の末尾近くには、それと呼応して他の三人の反応が、

実に宏大な文構であつた。内容の運び方其の着想の大きい点に多和田をはじめ三人の同人はやゝ感を深ふした。

と記される。彼らの反応はそのまま、槇尾がウェルズ作品に接した際のものでもあるのだろう。

また、三人の反応を記した右引部に続いては、

同時に、ひよつとしたらきやつは訳の焼き直しをしたのではあるまいかと云ふ考へ方も期せずして皆の頭にのぼつて来たのだ。

とも記述されるし、それより前には、

最も呉々も断つて置きたい事は彼の構想が純創作であるか、はたまたやき直しであるかと云ふ事は問題外にしてもらはなくてはならぬ事だ

従つてこの話を聞いてゐる三人の同人達でさえも牧野の話が、創作であるか、訳物であるかはた訳の焼き直しであるかと考へ迷ふたのである。

と見える（傍点引用者）。しかし、ここに示された三人の疑念に対して、牧野は、「煙草に火をつけてすましたもの」で、「一同を煙にま」く。そして、

田中、佐分利、多和田は未だまつてゐるが牧野だけは煙草の煙をわに吹き乍らわらつてゐた。

という一文で、作品全体が締めくくられている。

右の部分は、槇尾の『透明の人間』がかなり強く意識された内容になっているのではないかと思われる。同作は、先述通りウェルズ作品の翻案模倣作つまりは「やき直し」であった。翌年に発表される同作品の、少なくともどの程度かの「構想」は、『或る科学者の清談』の時点ですでに、槇尾の脳裏にあったとしてもおかしくあるまい。ウェルズ作品の一場面をほぼそのまま翻訳して自らの「構想」として語り、その点について「煙にま」く牧野は、間もなく同作品の翻案模倣作『透明の人間』を発表する槇尾自身でもあるのだろう。

さて、前稿にて昭和三年の『透明の人間』を取り上げた際に問題にしたのは、そのタイトルも含めて、どこにも「透明人間」という語がまだ使用されていない、という点であった。「透明の■人間」を中心として「透明の■人」「透明体の■人間」は見られるが、「透明人間」は一切出てこない。そのことを前稿では、昭和三年の時点にはまだ、「透明人間」が少なくとも熟語として成立していなかったことを示唆するものとして挙げておいた。その後、前年発表の『或る科学者の

清談』の存在を知った。同作品では、ウェルズ作品の翻訳が多くを占めていること、先述通りであるが、その中で「invisible man」の訳語としてあてられていたり、そうでなくても透明人間を指し示す語として使用されていたりするのは、計十二例見られる「透明な人間」もしくは二例存する「透明な人」のみであって、「透明人間」はやはり一例も見られない。槇尾の中で、「透明な人間」から「透明の■人間」への変遷があったようだが、それはとにかくとして、その頃にはまだ「透明人間」という熟語は成立していなかったことを、一層強く示唆することになろう。前稿に述べた通り、また従来指摘されてきたところでもあるが（前稿注1参照）、「透明人間」という語が誕生するのは、ウェルズ作品を原作とした映画がジェイムズ・ホエール監督によって一九三三年にアメリカで制作され、それが翌昭和九年（一九三四）の三月十三日に大阪松竹座で封切られた時点であった。タイトル「The Invisible Man」に対して、「透明人間」という訳語があてられたのであった。

前稿にも触れたが、透明人間関係の槇尾作品が、もう一点ある。昭和十五、六年（一九四〇、一）に発表された、『透明人』である。『逓信協会雑誌』の第386号（昭和十五年十月）と第391号（昭和十六年三月）に分載されている。新作ではなくて、『透明の人間』をもとにしたもので、その点、冒頭に、

本稿は、昔僕が雑誌「キング」に連載した科学小説「透明人間」の構想を追つてこれを圧縮改稿したものである。（作者）

と断っている（傍線傍点引用者）。『透明の人間』はまさに、「雑誌『キング』に連載した科学小説」（破線部）であって、同作品を「圧縮改稿」したものだと述べているに違いない。ところが、その『透明の人間』のタイトルを「透明の人間」でなく「透明人間」と記している。単純なミスである可能性も考えられようが、一方で、冒頭の断り書きの中で自らの作品名を挙げるのに、そのような誤りをどの程度犯すものだろうかと思える。それに、何よりも本作自身のタイトルを、もとの「透明の人間」でもなく、また右の断り書きの中の「透明人間」でもなく、『透明の人間』さらには『或る科学

者の清談』において使用されたこともない、「透明人」としているのであって、タイトルに対する強いこだわりが感じられる。単純なミスだとは考え難いのではなかろうか。なお、『透明人』の本文中には、「透明の人間」「透明の人」が『透明の人間』と同じく一部使われる以外は、「透明人」を使用していて、「透明人間」の使用例は一つもない。

『透明人』が発表された昭和十五、六年は、ウェルズ作品を原作とする映画のタイトルに訳語「透明人間」があてられてから、もう六、七年経過している。前稿にも述べた通り、その映画は大変好評で人気を博したのであって、同時点にはもう、新語「透明人間」は充分に定着・普及していたはずである。例えば、前稿にも挙げたが、コメディアンによる日記『古川ロッパ昭和日記』（晶文社、昭62）の昭和十五年四月十六日条に、自身が「トビ、のため」顔を「包帯ですっかりくるんで」いるのを「透明人間の姿で」、その翌日条には「透明人間みたいになって」と表現していたし、後に取り上げる通り、昭和十三年には子供向けの赤本マンガ『透明人間』が刊行されてもいた。そうした状況にあって、自らの過去の作品『透明の人間』のタイトルを殊更「透明人間」と断り書きに記し、そうしつつ一方で、同作の「圧縮改稿」作品は「透明人」と題していて、本文中にも「透明人間」を一切使用していないのである。タイトルに対するこだわりとともに、「透明人間」という語に対する、何らかの複雑な思いが感じられる。その思いを具体的に明かすことは難しいが、例えば、まさに「透明人間」ではないものの、「透明な人間」「透明の人間」を訳語として使用し、作品のタイトルともしてきた自分こそが、「透明人間」という新語のもともとの生みの親であるのだという、自負の念のようなものを、その複雑な思いのうちの一つとして想定することができるだろうか。

なお、右のことと関係する面もあるのかどうか、ウェルズ作品を原作とする昭和八年制作・翌年松竹座封切の先述のアメリカ映画『透明人間』では、ウェルズの原作と違って、グリフィンの師事する科学者の娘で、グリフィンの恋人のフロラが登場し、そのフロラが見守るなか、グリフィンが息を引き取り、そしてようやく元の姿を取り戻す、という結

末を迎えるが、ウェルズ作品の翻案模倣作と言うべき昭和三年の槇尾『透明の人間』でも、高木の師の星野先生の娘で、高木の元恋人の美代子が出てきて、自殺した高木の遺体に縋り付き、それとともに高木が元の姿を取り戻す、という結末になっていて、映画を先取りしたような同趣のアレンジが加えられている。偶然であるのか、それともそうでない可能性も考えられるのか、いずれにせよ、「透明人間」という語の誕生の前後における、この槇尾赤霧という、ほとんど無名のSF作家の、透明人間をめぐる動向には、なかなかに興味深いものがあるように、一層思われてくる。

赤本マンガ『透明人間』あらわる！

前稿において、昭和十三年（一九三八）に漫画『透明人間』が刊行されたことに言及していた。映画『透明人間』が大阪松竹座で封切られてから、すなわち「透明人間」という語が誕生してから、四年後のことである。あるいは、右の槇尾赤霧が、『透明の人間』を「圧縮改稿」し、『透明人』と改題して発表する、二、三年前のことである。ただ、前稿においては実は、古書肆の案内に従って右漫画本に触れておいたに過ぎなかった。しかし、その後、幸いにして同漫画本を入手することができた。そこで、その漫画本について報告・紹介しようというのが、小稿の中心的な目的である。前表紙から後表紙まで順に、全体の影印も掲げることにした（後掲図3）。

その漫画本は、縦一三・四糎×横一八・五糎の色刷り簡易装丁本一冊。前表紙の見返し部分から始まり、後表紙の見返し部分まで及んでいて、それらを含めて全二十六頁。前表紙見返し部分の右半分にはタイトル「透明人間」が上方に大きく掲げられているが、その箇所以外の最後までの各コマには順に番号が付されており、全部で九十六コマになっている。多くの場合、一頁を四コマに割っているが、中には三コマあるいは二コマに割った頁も見られる。吹き出しの中の台詞など、専ら漢字片仮名交じりで記す。前表紙右上に縦書きで「スピード漫画」、同中央上方に横書きで大きく「透

明人間」。そして、後表紙の右端には小さく、

昭和十三年一月五日印刷
昭和十三年一月十日発行
東京市浅草区浅草橋二丁目八番地一
画作兼発行者　中村惣次郎
東京市浅草区左ヱ門町一番地
印刷者　柴田虎雄
東京市浅草区浅草橋二丁目八番地一
発行所　中村書店
電話浅草(84)四九三一番

と見える。昭和十三年一月十日に浅草の中村書店から刊行されたものと知れる。

中村書店は、例えば、最近の清水勲・猪俣紀子『日本の漫画本３００年　「鳥羽絵」本からコミック本まで』（ミネルヴァ書房、平31）が、第4章「昭和戦前期　講談社本から中村書店本へ」において、「子ども漫画の分野で多くのヒット作を出したもう一つの出版社は中村書店である。同社は個性的で画力のある作家を発掘し、童話本のように、夢があり温か味を紙面にたたえた上品で美しい漫画本をつくりだした」と紹介する出版社である。また、『日本の漫画３００年』（川崎市市民ミュージアム、平8）は、「中村書店では……ハードカバーの漫画本とは別に簡易装丁による安価なものも出版して読者層をひろげていった。これらの漫画本は作者の名前も記されておらず、だれが描いたわ(ママ)からないものもある」として、該当の漫画本四点の表紙の写真を掲げる（一一〇頁）。右の漫画本『透明人間』はまさに、この中村書店発行の

簡易装丁本の方に違いない。やはり、作者不明である。また、後掲影印の通り表紙に赤色が使われていて印象的だが、いわゆる「赤本マンガ」でもある。赤本および赤本マンガについて、例えば『のらくろであります！　田河水泡と子供マンガの遊園地（ワンダーランド）』（川崎市市民ミュージアム、令1）は、「（赤本は）通常の書籍流通経路に加えて、駄菓子屋や露店などで販売されていた、安価な漫画や絵本、講談本などの総称」「昭和に入りマンガが流行すると、版元はマンガ出版に注力し、『赤本マンガ』が子供たちの間で大流行する。粗末な紙に印刷され、内容は荒唐無稽で、絵の質も低いものが多かったが、描き下ろしであったため、比較的自由で多彩な表現がなされており、現在見るとその奔放な表現には新鮮な驚きも感じられる」などと解説し、さらに「赤本はその時々の人気作品を模倣していたことから、当時の子供たちの流行を反映した人気のバロメーターとも言える」と説く（一九頁　コラム「赤本」）。右の赤本マンガ『透明人間』は、先述の映画『透明人間』の人気振りが漫画世界に投影したものであるに違いなかろう。

川崎市市民ミュージアムは、漫画を専門に収集・調査・研究していて、中村書店刊行の赤本マンガも種々所蔵しているが、右『透明人間』は、その蔵書に含まれていないようである。その他、国立国会図書館（国際子ども図書館）などにも収蔵されておらず、所蔵する機関を知らない。それどころか、中村書店刊行の赤本マンガ『透明人間』というものについて何らかの形で記述したものさえ、メディア芸術データベースなども含めて、今のところ管見に入らない。稿者の手許に存する漫画本『透明人間』は、従来その存在自体知られておらず、何らかの機関に所蔵されているということもない、新出の作品であるだろうか。中村書店刊行の赤本マンガ『透明人間』があらわれたのである。

ところで、透明人間を取り上げた漫画・コミックの類は、今も多く生み出されている。平成十三年（二〇〇一）以降すなわち二十一世紀になってから刊行された、「透明人間」をタイトルに含んだものに限っても、

吉野朔美『透明人間の失踪』（フラワーコミックス、小学館、平成十五年）

克・亜樹『透明人間⇅協定』（小学館、平成二十四年）
安藤ゆき『透明人間の恋』（マーガレットコミックス、集英社、平成二十五年）
増田英二『透明人間の作り方』（少年チャンピオン・コミックス、秋田書店、平成二十六年）
荻野純『透明人間の骨』（ヤングジャンプコミックス、集英社、平成二十九年）
路田行『透明人間そとに出る』（ハルタコミックス、KADOKAWA、令和五年）

などがざっと挙げられる。内容は多彩で、母親に対する父親の激しいDVに端を発して物語が展開する『透明人間の骨』など、特に印象深いものもある。他に、「透明人間」をタイトルに含まないものにも、岩飛猫『透明男と人間女～そのうち夫婦になるふたり～』（双葉社、令和三年）などあるし、人気の堀越耕平『僕のヒーローアカデミア』（平成二十六年～）は、透明人間「葉隠透」を登場人物の一人としている。あるいは、久田碧『透明人間灰田』（GANMA、令和四年）のように、電子書籍として配信されたものも数多い。

現在なお盛んに生み出され続けている、これら透明人間を取り上げた漫画・コミックの類を、「透明人間」をタイトルに含んだ単行本に限定して、時代的に遡りたどっていけば、手塚治虫『ケン1探偵長 透明人間』といった著名作家の作品をも経つつ、大阪の榎本書店から相次いで刊行された、昭和二十四年のポケットマンガ『透明人間』（西岡英志著）やスクリーンマンガ『透明人間』（著者未詳　子供マンガ文庫『謎の透明人間』として翌年再版）へと至りつく。ところが、そこからさらに遡ってということになると、なかなか見当たらない。「透明人間」をタイトルに含むものに限定しなければ、よこいふくじろう『透明マント』（有楽社）も、単行本に限らなければ、『P．T．T 世界少年』五―一に掲載された、小川哲男画の漫画『いたずらぶんちゃんの透明人間』も拾い出せるが、それらも共に昭和二十三年刊行のものである。昭和十年代あるいは戦前に遡るものは、全く管見に入らない。以上の状況を踏まえるに、少なくとも「透

明人間」をタイトルに含んだ単行本としては、新語「透明人間」誕生後四年にして出現した、稿者の手許にある一冊しか見出せていない、昭和十三年刊行の右の赤本マンガ『透明人間』が、かなり突出して早い事例であり、さらには日本最初のものなのではないかと見られるのである。

ところで、川崎市市民ミュージアムは、著作権が消滅している収蔵品を漫画資料コレクション（https://kawasaki.iri project）にて全頁公開しているが、そのうちの一つに、『忍術自来也異変』がある。右の赤本マンガ『透明人間』とほぼ同じ寸法で、前表紙の右上に「スピード漫画」と縦書きするのも同じである。後表紙右端の記載も、先に掲げた右『透明人間』の場合と完全に同一である。『透明人間』と全く同じく、昭和十三年一月十日に中村書店から発行された赤本マンガなのである。両書は、同時発行されたようである。

前稿において、古典作品に登場する透明人間の類は、身に付けた衣服ごと透明になる、言わば「着衣透明人間」であると述べた。例えば、合巻『児雷也豪傑譚』（国書刊行会刊影印・翻刻）三十七編には、隈浦藤内・藤六兄弟が「隠形の術」によって透明人間状態になる場面が見られ、その箇所の挿絵では、輪郭を点線で描くことによって透明人間状態であることを表現しているが、明らかに衣装を身に付けている（後掲図1）。身に付けた衣装も履物も刀剣も含めて姿が見えなくなっているのである。そういうあり方は、後の様々な児雷也ものにも受け継がれているらしい。昭和七年（一九三二）刊行の評判講談第六巻『怪傑児雷也』（大日本雄弁会講談社）の場合、児雷也が「隠形の術といふ自分の目指す人には見えるが、他人には少しも見えないといふ、神変不思議な術」を使う場面の挿絵（後掲図2）において、前稿に掲げた万延元年（一八六〇）刊『三国七高僧伝図会』巻一「竜樹菩薩伝」の挿絵と同じく、周囲に多くの「・」を描き加えることによって透明人間状態であることを表現しているが、やはり衣装も履物も刀剣もすべて身に付けたまま、隠形しているようである。遡って、日本最初の特撮映画とされる牧野省三監督・尾上松之助主演の大正十年（一九二一）

公開のサイレント映画『豪傑児雷也』（日活）でも、児雷也が瞬時に姿を消したりするが、やはり着衣のままであるに違いない。そして、以上のような伝統を受け継いでいるのだろう、右の赤本マンガ『忍術自来也異変』でも、児雷也が隠形する場面（第79～89コマ）、『児雷也豪傑譚』と同様に輪郭を破線で描くことによって透明人間状態であることを表現しているが、やはり衣装など身に付けたまま姿を隠している。

一方、これも前稿に述べた通り、ウェルズのSF『透明人間』では、「科学」的理論のもとに身体の各組織を透明にする薬を開発・服用して透明人間になるのであって、衣服などに薬の作用が及ぶわけでなく、自らの存在を他者から全く視認されないようにするためには衣服などを脱いで全裸になる必要がある。ウェルズ作品以降、その影響力の大きさあって、そうした言わば「全裸透明人間」が日本でも次々と出現してくることになる。右の赤本マンガ『透明人間』でも、主人公の少年「ダンチヤン」が、発明した薬を服用して透明人間になるが、衣服や履物、あるいは手に持っているものは、元のままで消えていない。ウェルズ作品を原作とする映画の人気を承けて制作された結果であろう、着衣透明人間ではなく、全裸透明人間となっているのである。

前稿にはまた、古典作品などにて受け継がれてきた旧来の着衣透明人間と、近代になって外から流入してきたウェルズ式の全裸透明人間とが、その後さまざまに交雑していったと述べた。ウェルズ作品を原作とする映画が封切られ、「透明人間」という語が誕生して四年、それぞれの背景あって新旧の透明人間を各々登場させる赤本マンガの『透明人間』と『忍術自来也異変』が、先の通り同じ出版社から同時に発行されたことは、それら両透明人間がやがて上述の如き交雑へと向かうことを予測させるような、象徴的な事象と見なすことができよう。日本における透明人間の歴史を辿ろうとする時、その点、是非銘記しておきたいところである。

なお、『透明人間』のダンチヤンは、出来た薬を飲んだあと、ポチ公の反応を見て、「サア姿ガ消エタラシイゾ　シメ

シメ」と言っており（第7コマ）、自らの身体が消えていることを自らは確認できないらしい。つまりは、透明人間自身には自らの身体が通常通り見えるものと理解されているようである。前稿に述べた通りそれは、旧来の透明人間のあり方であって、自分でも自分の身体が見えなくなるウェルズ式の新興の透明人間とは異なっている。赤本マンガ『透明人間』に登場するのは、旧来のものと同じく自身不可視化しない透明人間だが、しかし確かに新興の全裸透明人間なのでもあって、同作品においてすでに、新旧の透明人間が交雑している面を含んでもいることになる。

また、赤本マンガ『透明人間』に登場するのは、右に述べた通り全裸透明人間であるけれども、全裸になって姿を隠す場面がどこにも見られない。薬を服用し着衣のまま透明人間となって横たわり、「着物（キモノ）ヲヌイデ　ハダカデ逃（ニ）ゲダシタト見（ミ）エルワイ」と思わせたりはしている（第44コマ）。しかし、全裸になって存在が完全に視認されなくなるという場面は、最後まで全く出てこないのである。全裸透明人間を登場させる作品が、透明人間を全裸にすることなく終わるという事例は、珍しいのではないかと思われる。全裸になって完全に視認できなくなった存在を絵に描くことが難しく感じられたためだろうか。しかし、赤本マンガ『透明人間』は、透明人間を絵にするのに、衣服や履物のみを描くことで表現する（第7～9・43・44・45・51コマなど）方法だけでなく、同時に、先述の『児雷也豪傑譚』や『忍術自来也異変』に見られたのと同様の、顔や手足の輪郭を破線で描いて表現する方法もとっている（第6・46・50・53・57コマなど）ので、透明人間が全裸になり衣服などがなくなっても、後者の方法によれば透明人間を絵にすることもできるはずである。にもかかわらず全裸にしなかったのは、そうした技術的な問題ではなくて、子供向けのマンガで主人公の少年を全裸にさせ、粗い輪郭だけとはいえ、それを描くことを憚った結果でもあるのだろうか。いかなる理由・事情があったのか否かわからないが、日本最初のものかと見られる右「透明人間」漫画本が、全裸透明人間が全裸になることなく終わるという、上述の如き特異な側面を有していることにも、注意しておきたい。



図１　『児雷也豪傑譚』第三十七編（国書刊行会刊影印より）　安政７年（1860）



に打乗つて山門の住家を立出で、虚空を飛んで二時餘りで大磯へやつて參りました。先づ蠟兵衛の不在宅を訪ねると、お六は居ない。それから喜之助の許へ來て見ると、これも宅に居ない、女房のおさと捨松ばかりなので、仕方がないと奉行所の牢屋に忍び込みました。その頃の牢屋は重罪と輕罪と二つあつて、兩方合しても百人とはゐない位、蠟兵衛は重罪だから、一番の牢屋、兒雷也はその前に立つた。勿論夜中の事ではあり、術を使つてゐるのですから、勿論見張人の眼には入りません。そこで兒雷也は隱形の術といふ自分の目

指す人には見えるが、他人には少しも見えないといふ、神變不思議な術を使ひまして牢の中に入り、疲れ臥してゐる、蠟兵衛の枕邊に忍び寄り密かに呼覺して、

兒『さて蠟兵衛殿俺はこの度のお前さんの災難を聞き越後からわざ〳〵やつて來たんだ』

言はれて蠟兵衛は、さも嬉しさうに起返つて、

図２　評判講談第六巻『怪傑児雷也』（昭和７年、大日本雄弁会講談社）

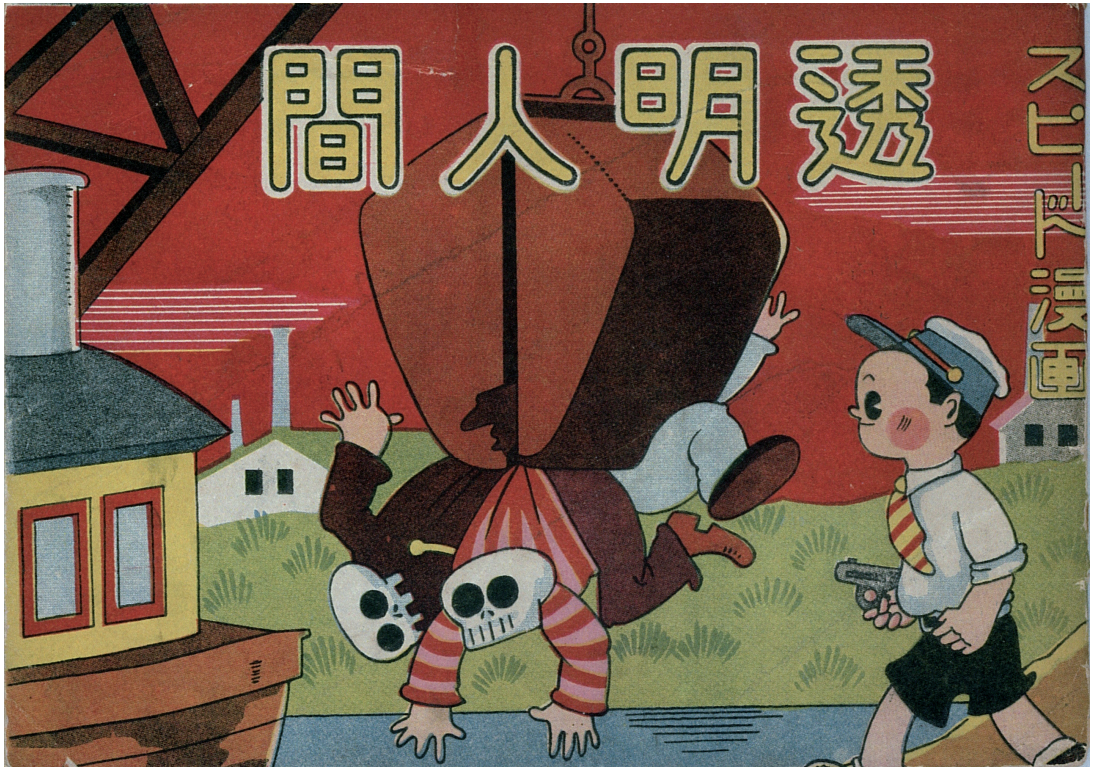
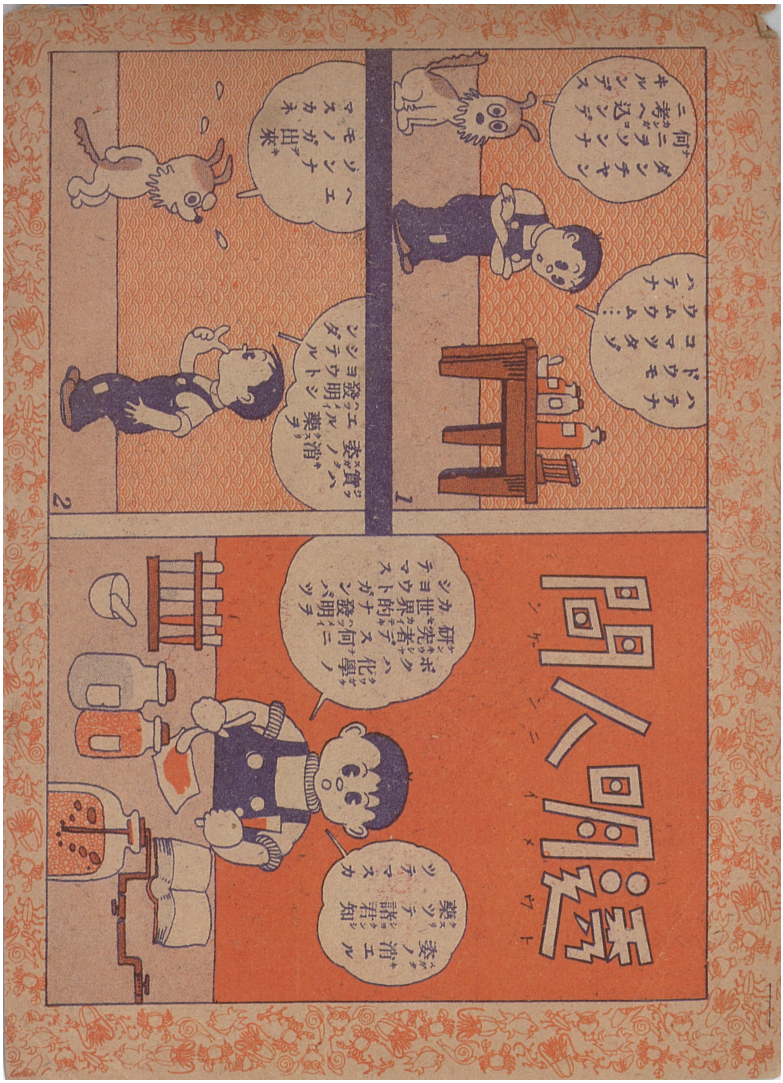
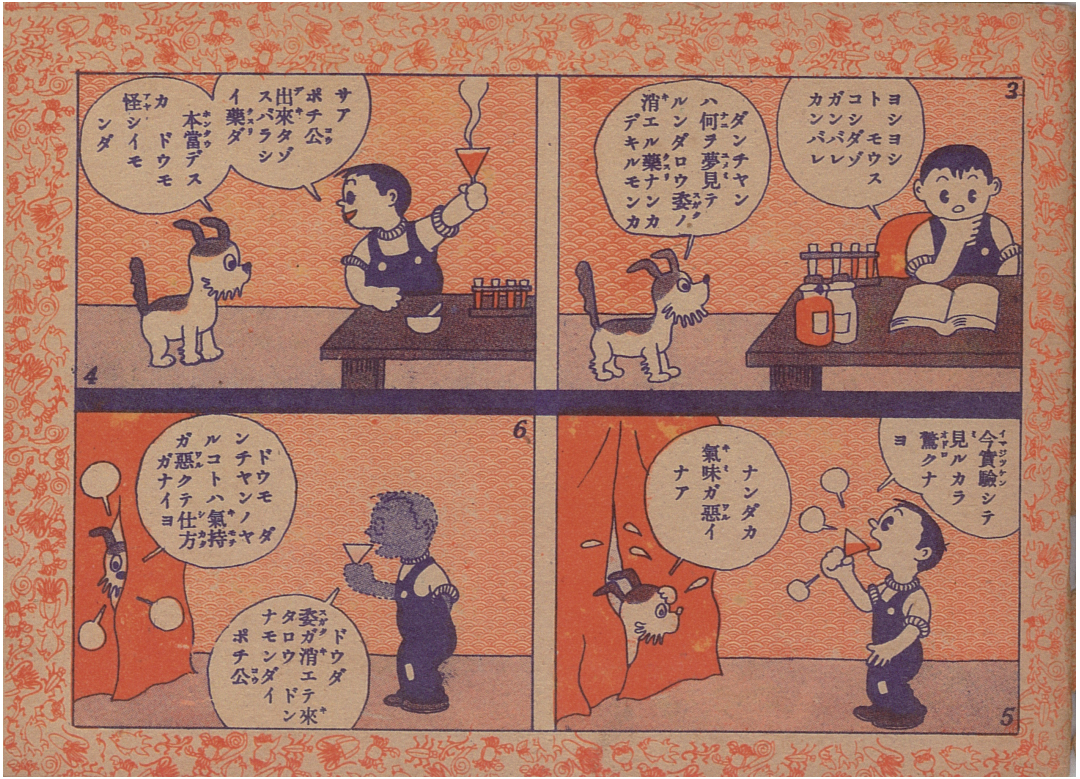
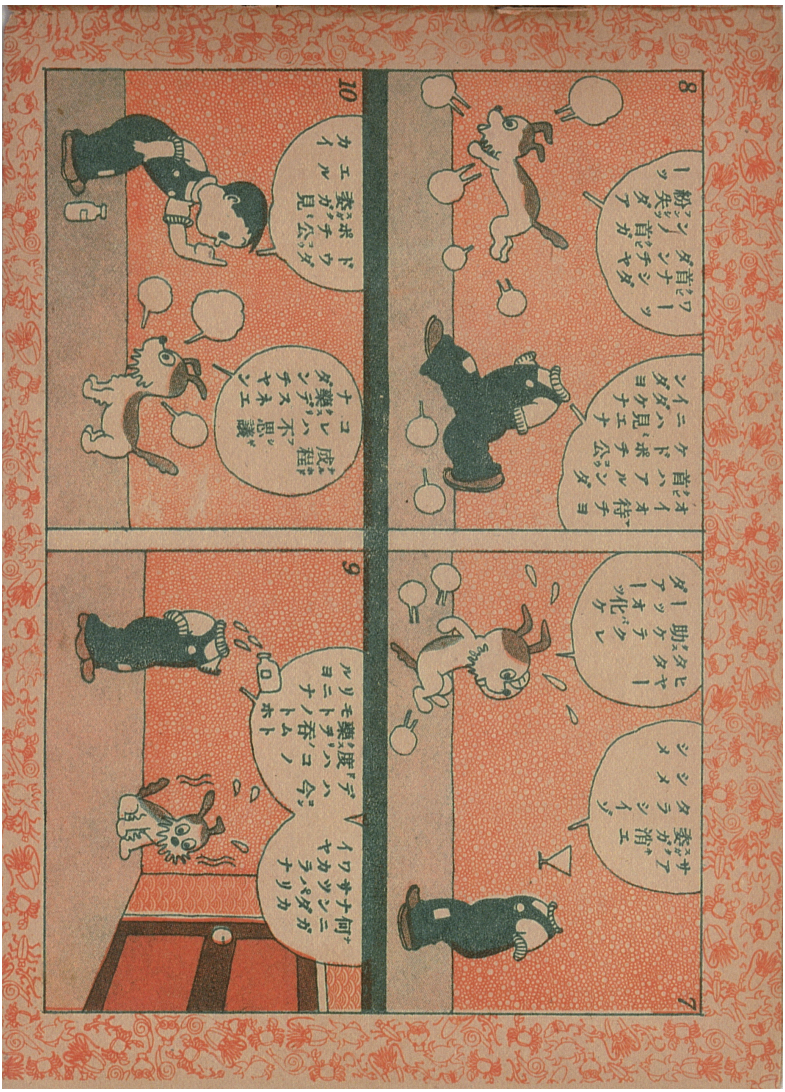
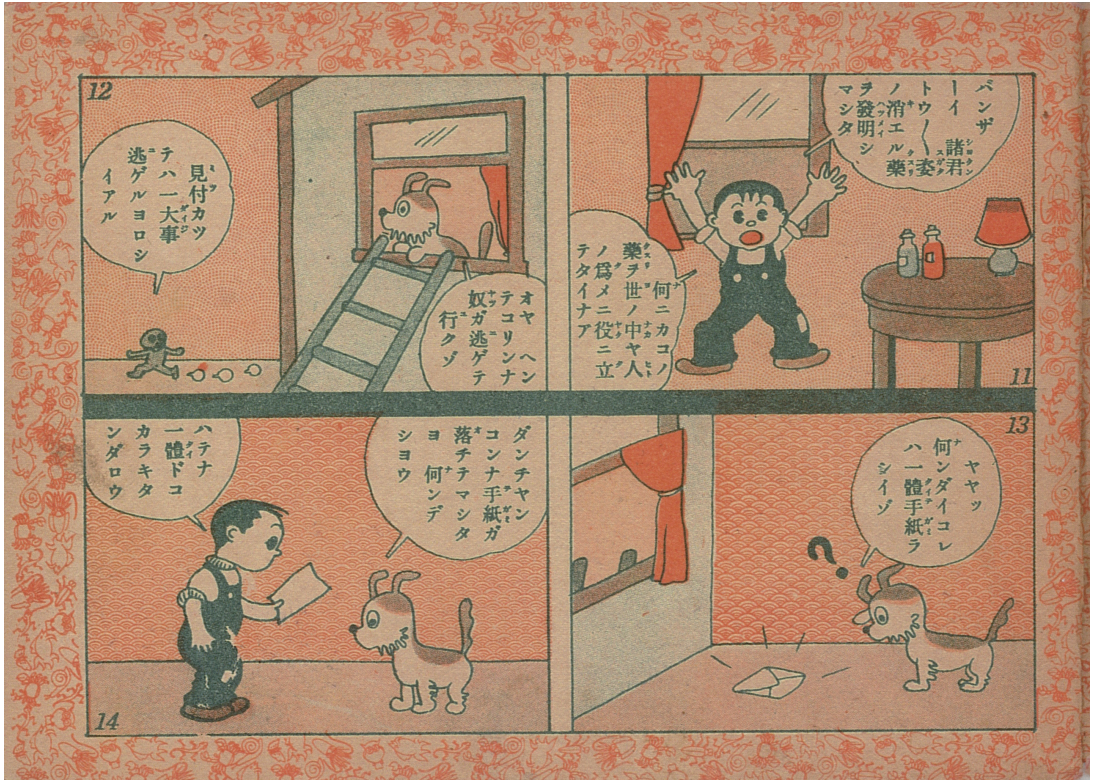


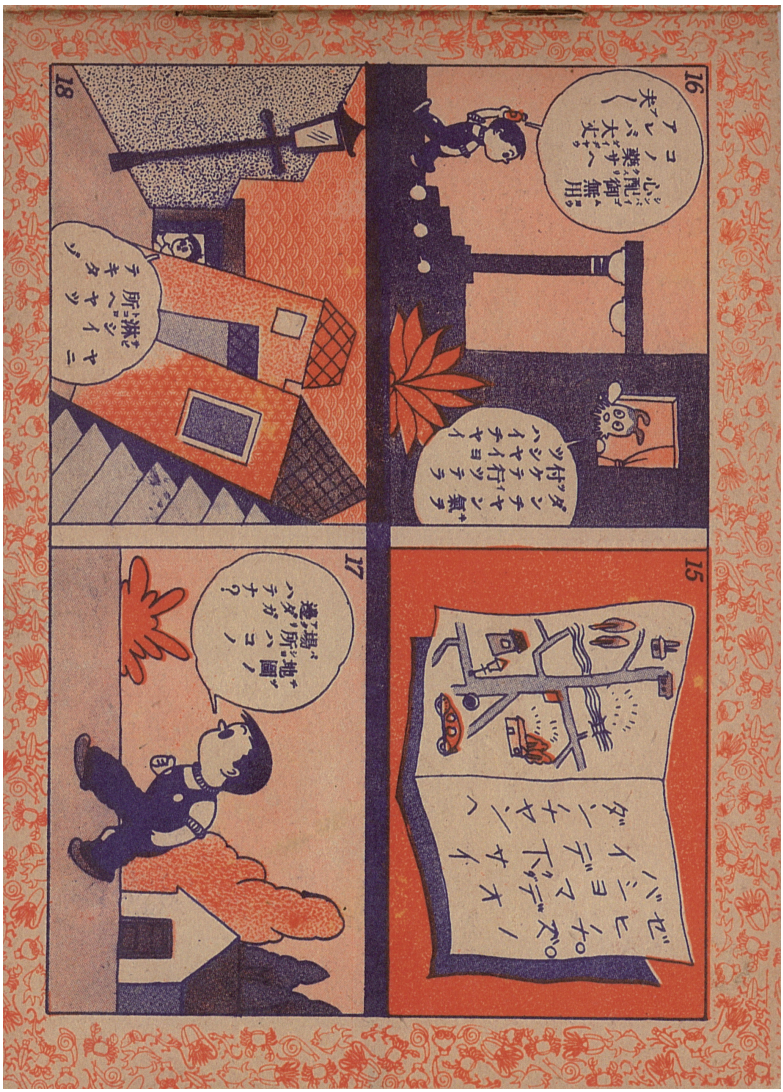
図３　赤本マンガ『透明人間』（昭和13年、中村書店）

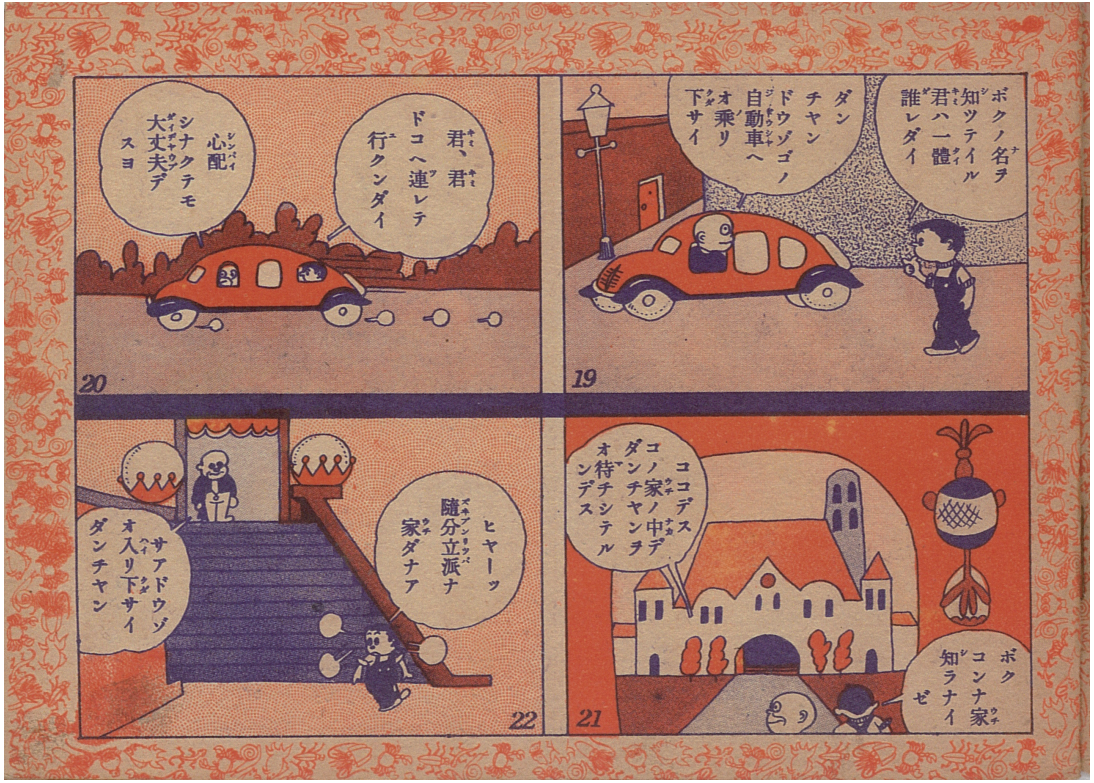

透明人間
ドウモナ
ウムウム…
何ダシテヤン
ニ考ヘ込ンデナイ
ヘエ
モノンナ
マスカ出来
ンショ發明エル
ダテウト薬ノ消ヘ
麥ノ消エル
藥ツテ請君知
ボクハ化學ノ
研究者デス何ニ
ショウト發明ガ
世界的ナ
マスカ

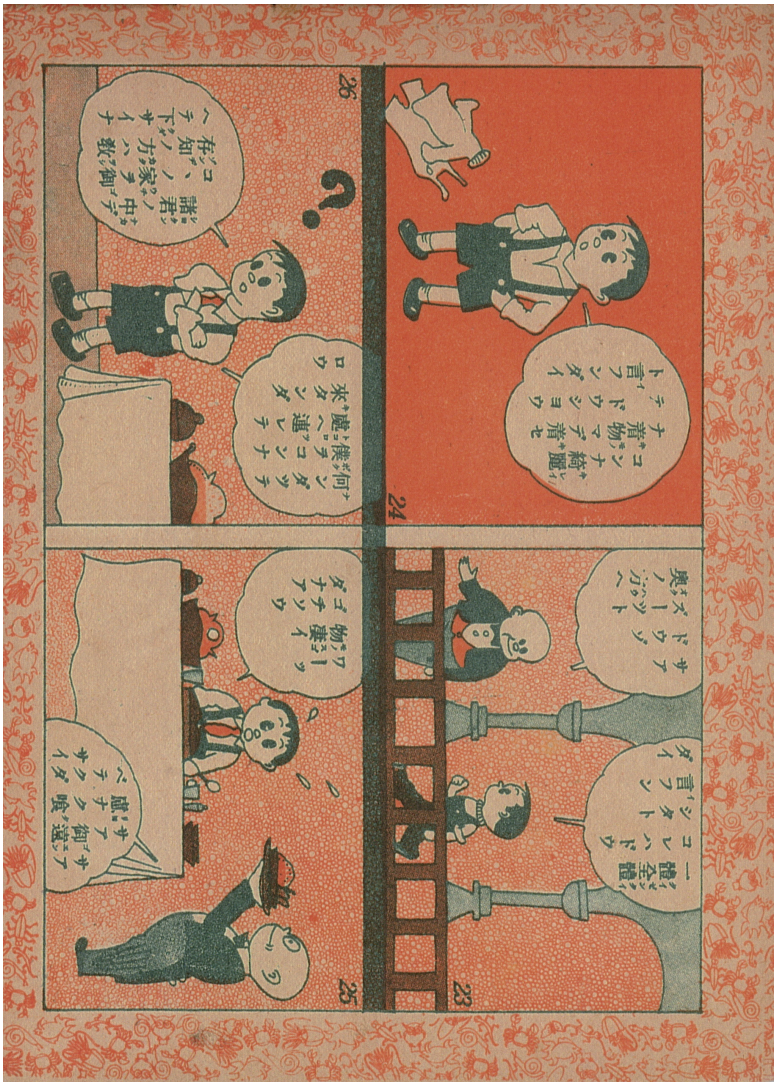

3
ヨシヨシ
コトモウス
コシダゾゾ
ガンバレ
カンバレ
ダンチヤン
ハ何ラ夢見テ
ルンダロウ妻ノ
消エル薬ナンカ
デキルモンカ
4
サア
ポチ公
出來タゾ
スバラシ
イ薬ダ
本當デス
カドウモ
怪シイモ
ンダ
5
今實驗シテ
見ルカラ
驚クナ
ヨ
ナンダカ
氣味ガ惡イ
ナア
6
ドウダ
妻ガ消エテ來
タロウドン
ナモンダイ
ポチ公
ドウモダ
ンチヤンノヤ
ルコトハ氣持
ガ惡クテ仕方
ガナイヨ

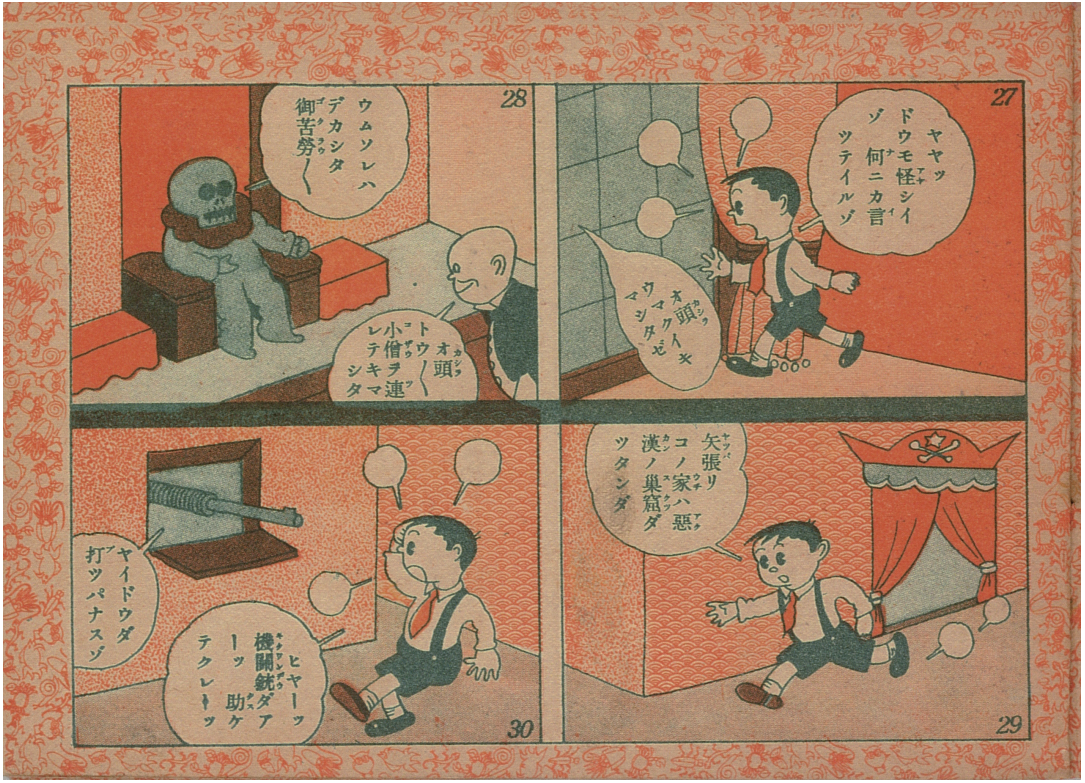

7
姿ガ消エ
シシタラシイゾ
助ケタヒヤー
アッカラオー化ケツ
8
ワー紛失ッ
首ガヤタ
首ハオイテ待チヨ
ケ首ハアルボ公ダヨ
ソイニンダ見ナエ
9
デハ程度ノ不思議
イワサナ何ヤカツシニラレタガナリカ
ルリモ藥ヨニトテ呑ンダコ今ナノホト
10
ドウボチン公ダ
姿ガ見エカイル
コレハ不思議
ナ藥デスネ

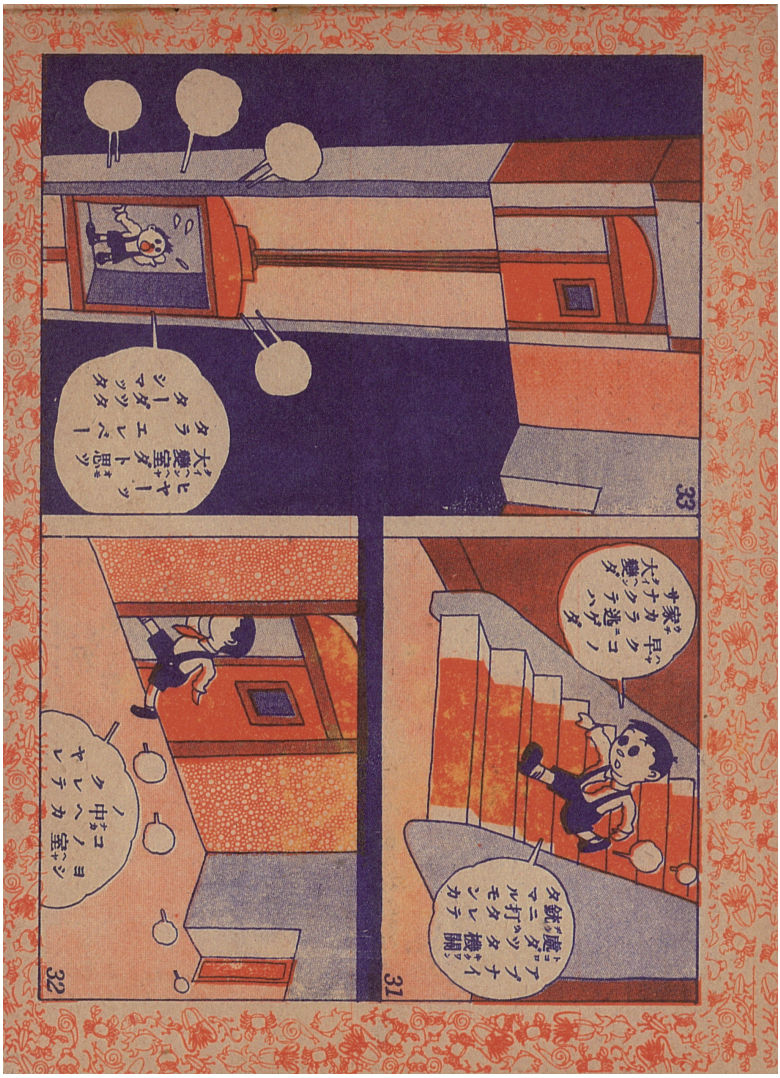

11
バンザーイ 諸君トウ〜姿ノ消エル薬ヲ發明シマシタ
何ニカコノ薬ヲ世ノ中ヤ人ノ爲メニ役ニ立テタイナア
12
オヤ ヘンテコリンナ奴ガ逃ゲテ行クゾ
見付カツテハ一大事逃ゲルヨロシイアル
13
ヤヤッ 何ンダイコレハ一體手紙ラシイゾ
14
ダンチヤンコンナ手紙ガ落チテマシタヨ 何ンデショウ
ハテナ一體ドコカラキタンダロウ

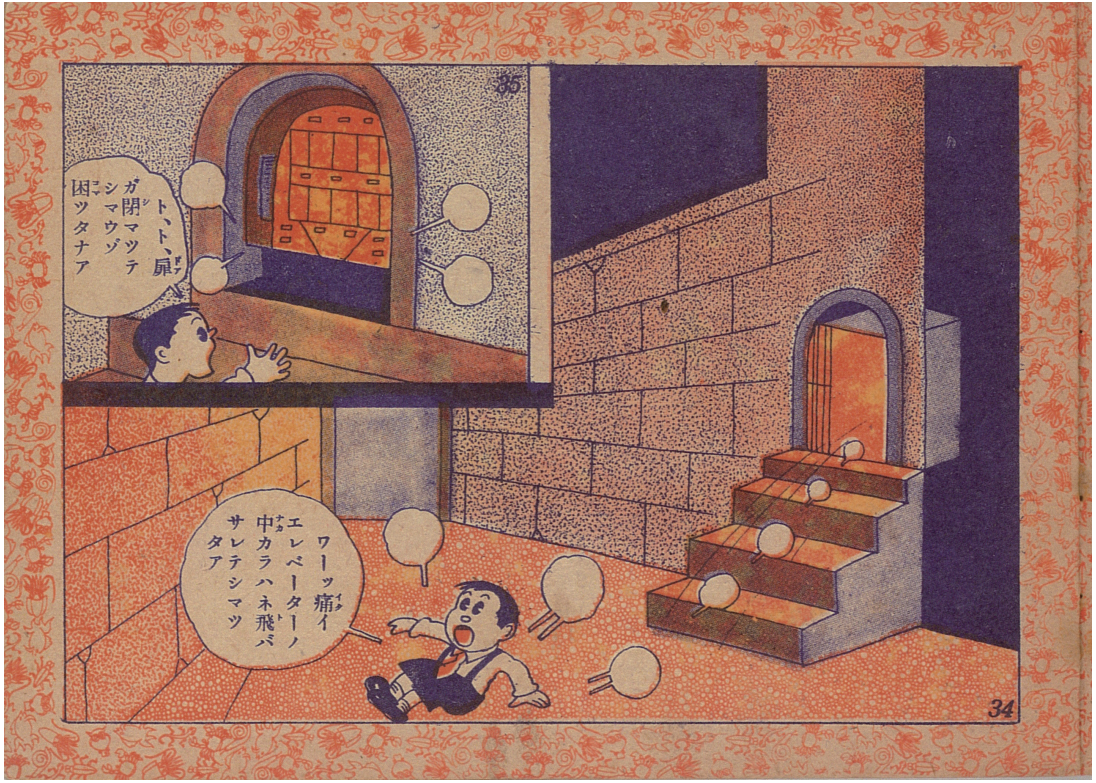

16
アコノ夫ハ心配御無用
ツイテイヤウ
ダンチヤン行ッテ氣ヲ付ケテ行ッテ
15
ゼヒ下ヘ
バンヨマデ
ダンチヤン
ヘイヤウ
18
テキタ所ヘシイヤ
ゾ
17
場ダガ地ノ
ハテ所ハコノ
ナ？


ボクノ名ヲ知ッテイル君ハ一體誰レダイ
ダンチャンドウゾゴノ自動車ヘオ乘リ下サイ
19
君、君ドコヘ連レテ行クンダイ
シナクテモ心配大丈夫デスヨ
20
ココデスコノ家ノ中デダンチャンヲオ待チシテルンデス
ボクコンナ家知ラナイゼ
21
ヒヤーッ隨分立派ナ家ダナア
サアドウゾオ入リ下サイダンチャン
22

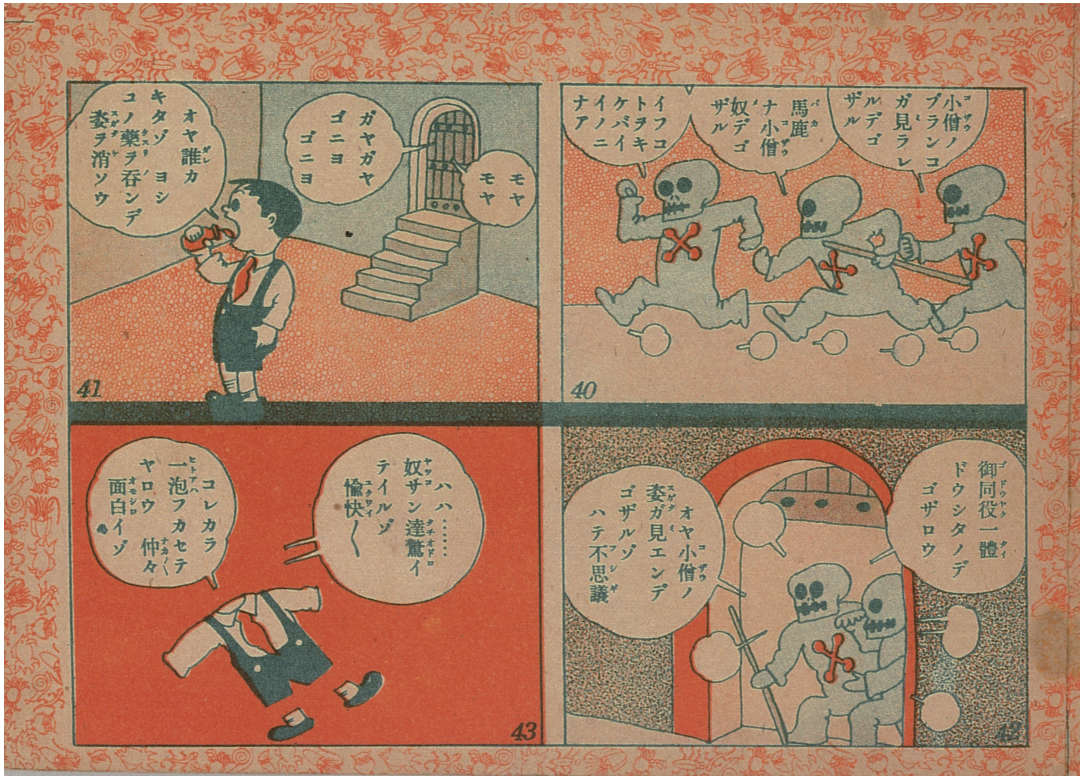

テナ言フンダイ
着物マデ着セ
コンナ綺麗ナ
ト言フンダイ
サアドウゾ
奥ズーツ方ヘト
ダイ言フンコレハドウ
一體全體
ダイナツウ
物凄イツ
ベテラ喰ヒ
サアサア御遠ヒ
ロウ
來タ處ヘ連レテ
何ンダツテ
ヘテ知ノ方ヲ家ノ中デ
ヘ存ジコ
諸君ノ
下サイナ
敎ヘ御ヲ


27
ヤヤッ
ドウモ怪シイ
ゾ 何ニカ言
ツテイルゾ
オ頭ヲ
ウマクイキ
マシタゼ
28
ウムソレハ
デカシタ
御苦勞〜
オ頭ヲ
トウ〜
小僧ヲ連
レテキマ
シタ
29
矢張リ
コノ家ハ惡
漢ノ巣窟ダ
ツタンダ
30
ヤイドウダ
打ツパナスゾ
ヒヤーッ
機關銃ダア
ーッ 助ケ
テクレ〜ッ

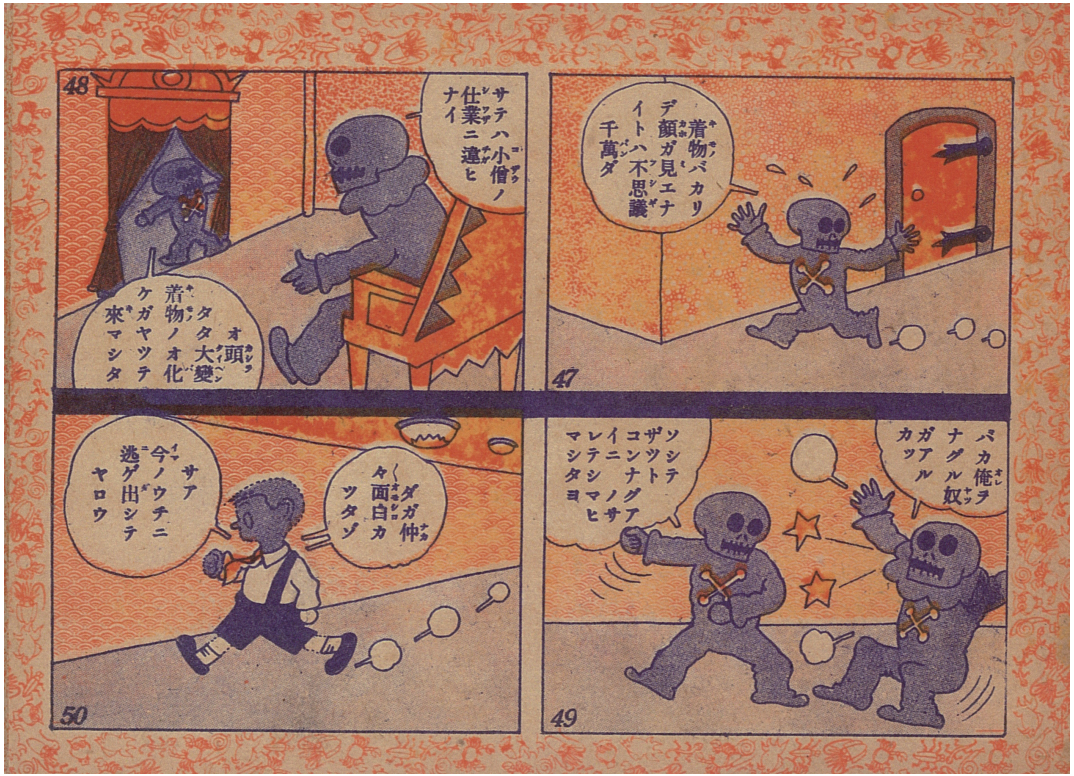

33
タラ　ヒヤーッ
大變室ダト思ッ
タ　ダ　エ　ン　ベ　ー
シマッタ
32
ノ　ク　中ヘ　コ　ノ　ヨ
ヤレテカ　室ヤシ
31
サ　家カ　早ク　コ　ノ
大變ダ　ナラ　逃ゲ　ハ
タ　銃マ　ル　モ　シ　カ
ダ　打タ　ン　ン　テ
ア　ッ　タ　機　ト　ア
ナ　ン　イ　ン　ロ　ロ
ヤ　ン　ヤ　ン　ロ　ロ

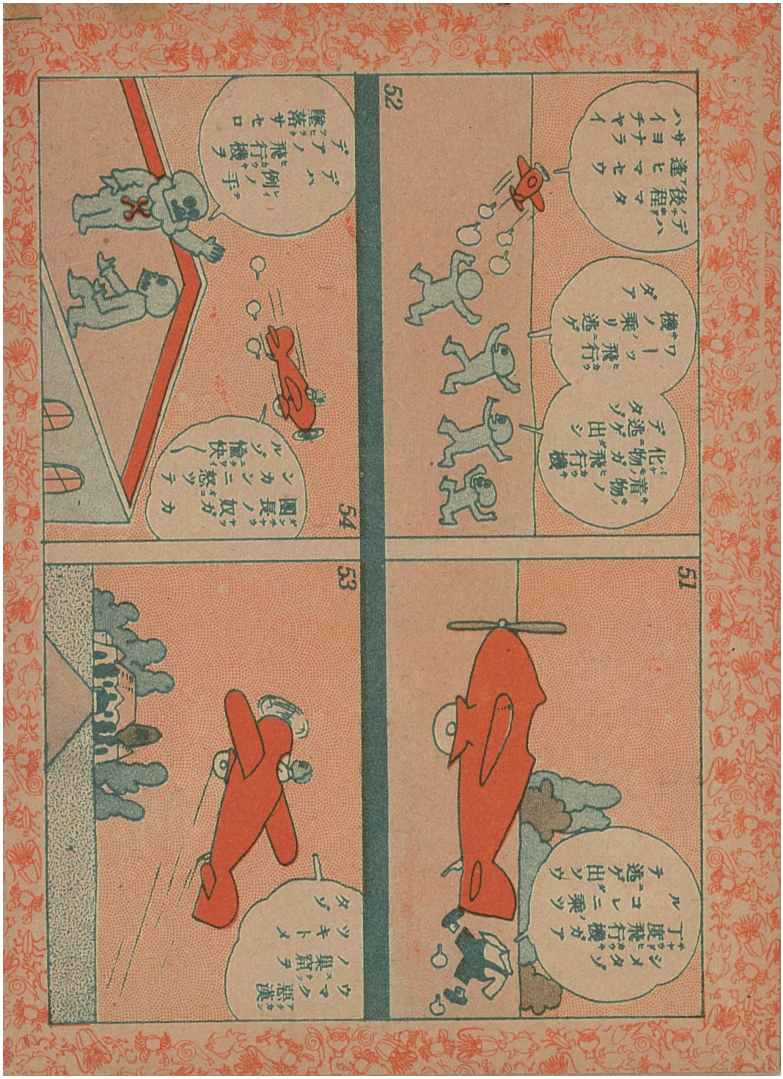

35
トト、扉ガ閉マッテシマウゾ困ッタナア
ワーッ痛イエレベーターノ中カラハネ飛バサレテシマッタア
34

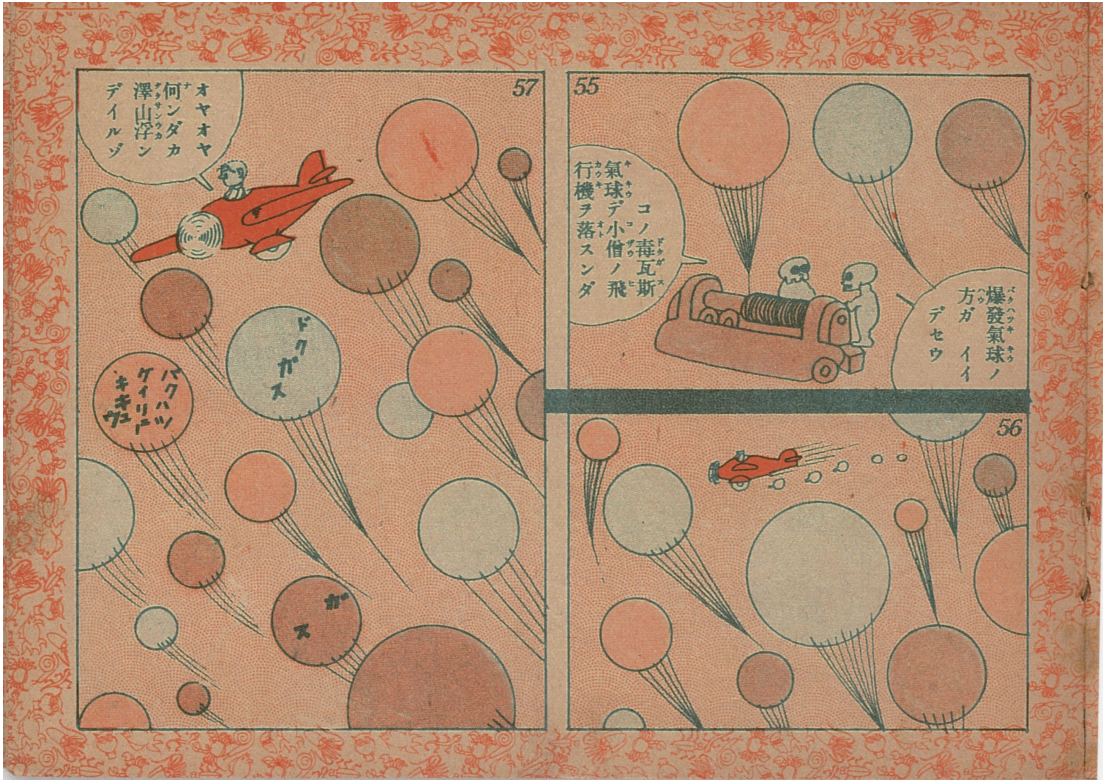

37
モタカンカ
ンマルニ
教ヘ貴様ナ
ンカ作リ方ナ
薬ガ大事ナ
ダ御氣ノ毒ダ
ナンウゴ小僧ダ
イデハウジ生意氣ナ
ゾヤルヨ
アモヨ
レナイ
ゾイサウ
モ
ヤ
36
ナノギ貴様ヤ等ヲ
一味ンダ
ダノレヲ
イゾバ教ヘテ
ダミホウ
シビハレ
エ
ル
ノ
消ノ
薬ノ製法
ヨテヤ
御馳走
ルシ
38
法ルヲ
ルヲ
ン白狀ヲ
ダサ
セ
アサ
ノカ
ルシ
ヲ
サ
ノ
ニ
ラ
小僧ヲ
サ木ヲ
カ
ヲ
ニ
ツ
製
39
イテ
來ヲ
連ヲ
レ
小僧ヲ
ノ
ヲ
ツテ
ゴ
ザ
マ
ス
カ
シ
コ
ツ
オ
ツ
ト

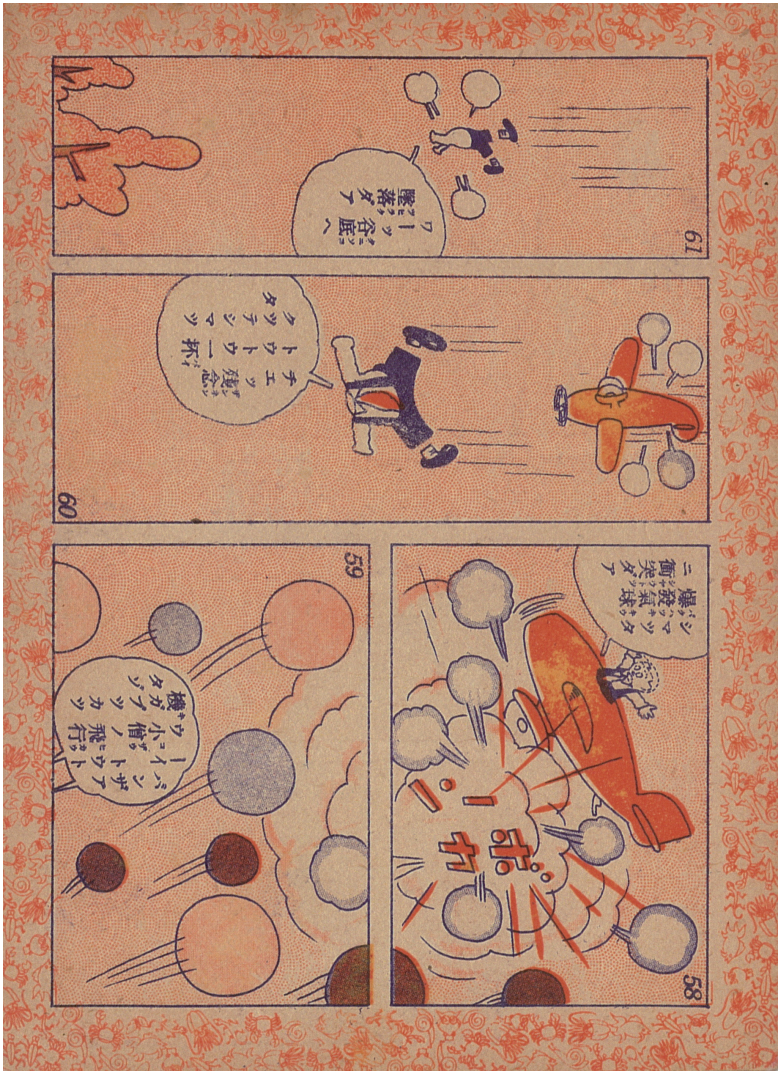

小僧ノブランコガ見ラレルデゴザル
馬鹿ナ小僧ト奴デゴザル
イフコトヲキケバイノニナア
40
御同役一體ドウシタノデゴザロウ
オヤ小僧ノ姿ガ見エンデゴザルゾハテ不思議
41
モヤモヤ
ガヤガヤゴニヨゴニヨ
オヤ誰カキタゾヨシコノ藥ヲ呑ンデ姿ヲ消ソウ
43
ハハハ……奴サン達驚イテイルゾ愉快ー〜
コレカラ一泡フカセテヤロウ仲々面白イゾ

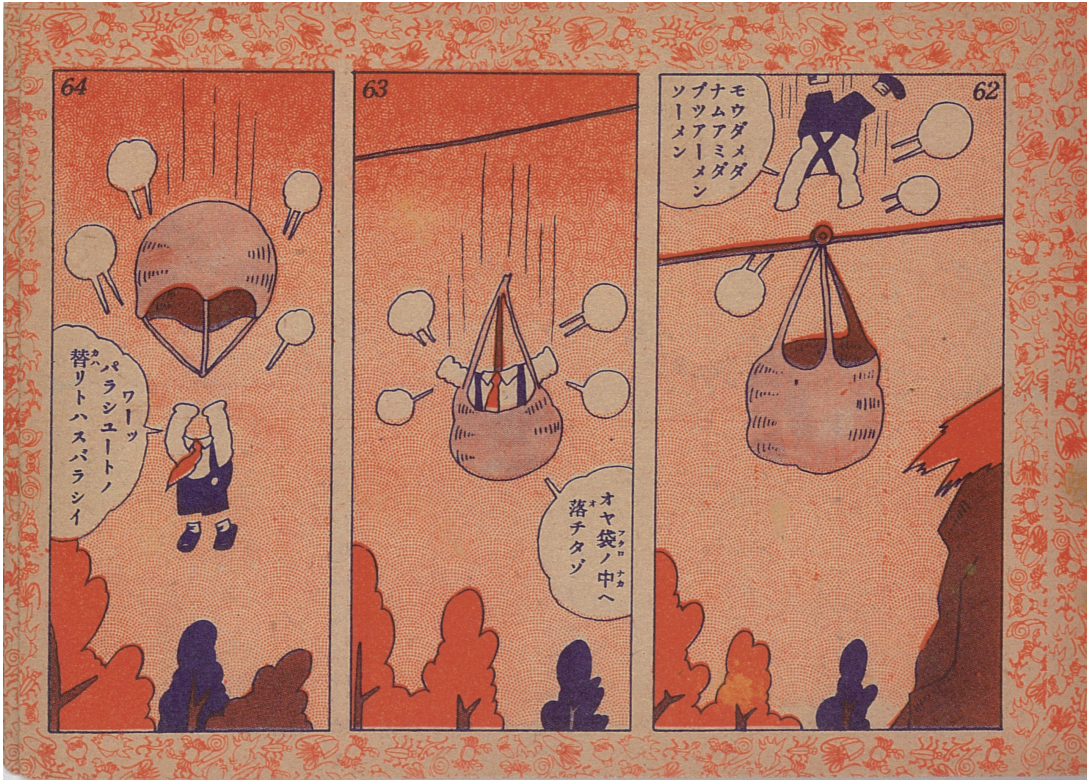

エシカ逃ゲイツイレモヤッ
イヤ頭ヲキナリ蹴飛ヤッ
バスアルカ
ヒヤー俺ッ
45
エダダヌイデ見ルワイ
着物ヲ
ダカデ逃ゲ
ハ
悪氣味ガ
ト
何ンイ
ヒヤー
アイニイルテワメヒヤ
ドマ
44
着物ダナア
馬鹿ニ強イ
痛イッ
悟ツシロ
コノガイコ
覺ヨ
エイッ
腰ガ抜ケ
ワーッ
オタオタ
オ化ケニ
ラレタ
ヤ
着物ノ
ヒヤー
46


48
サテハ小僧ノ仕業ニ違ヒナイ
オ頭ヲタタ大變
青物ノオ化ケガヤツテ來マシタ
47
青物バカリデ顏ガ見エナイトハ不思議千萬ダ
バカ俺ヲナグル奴ガアルカッ
ソシテザツトコンナグアイニノサレテシマヒマシタヨ
49
ダガ仲々面白カツタゾ
サア今ノウチニ逃ゲ出シテヤロウ
50

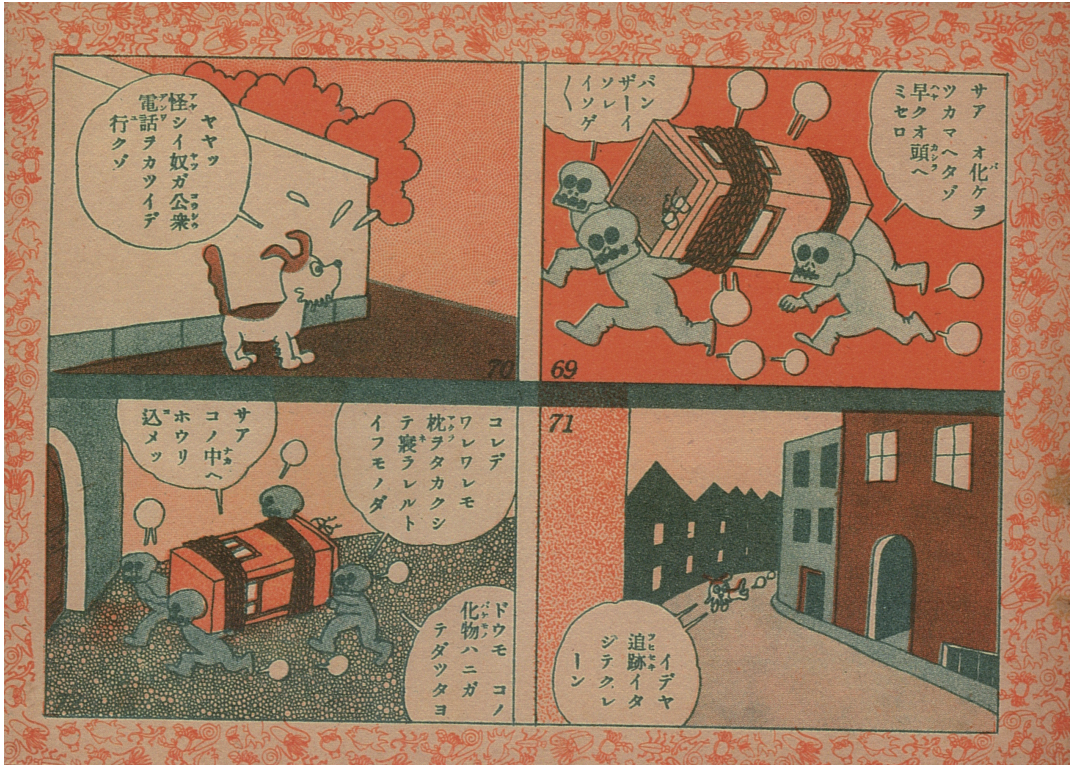

51
ルテ逃ゲ出シツ
丁度飛行機ガアシメタ
52
ハサヨナラヤイ
遠ヒマセウ
後程ハ
機ノ乗リ飛行ダア
ワーッ
化物ガ飛行機ニ
着物ノ
デ逃ゲ出シ
53
タゾ
ツキトメ
ウマク悪漢ノ巣窟ヲ
54
デハ例ノ手ヲ
墜落サセロ
デアノ飛行機ヲ
ルンカンニ怒ツテ
園長ノ奴ガ
ルンカン愉快


55
爆發氣球ノ方ガ イイデセウ
コノ毒瓦斯氣球デ小僧ノ飛行機ヲ落スンダ
56
57
オヤオヤ何ンダカ澤山浮ンデイルゾ
ドクガス
バクハツケイリーキキヲ
ガス

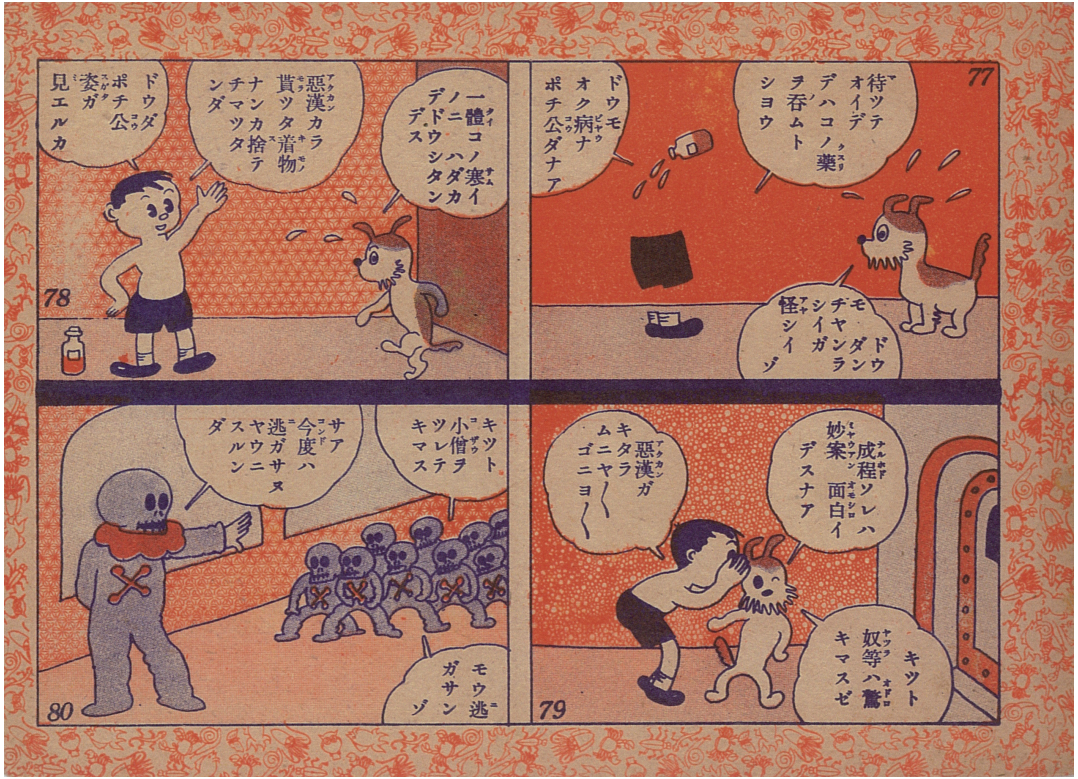

58
爆發氣球ダマッタ
ニ衝突ダマッタ
59
機ガブツカッタ
ウ小僧ノ飛行ト
イバンザトウア
60
チエッ殘念ダイ
クツテシマツタ
61
墜落ダア
ワーッ谷底ヘ

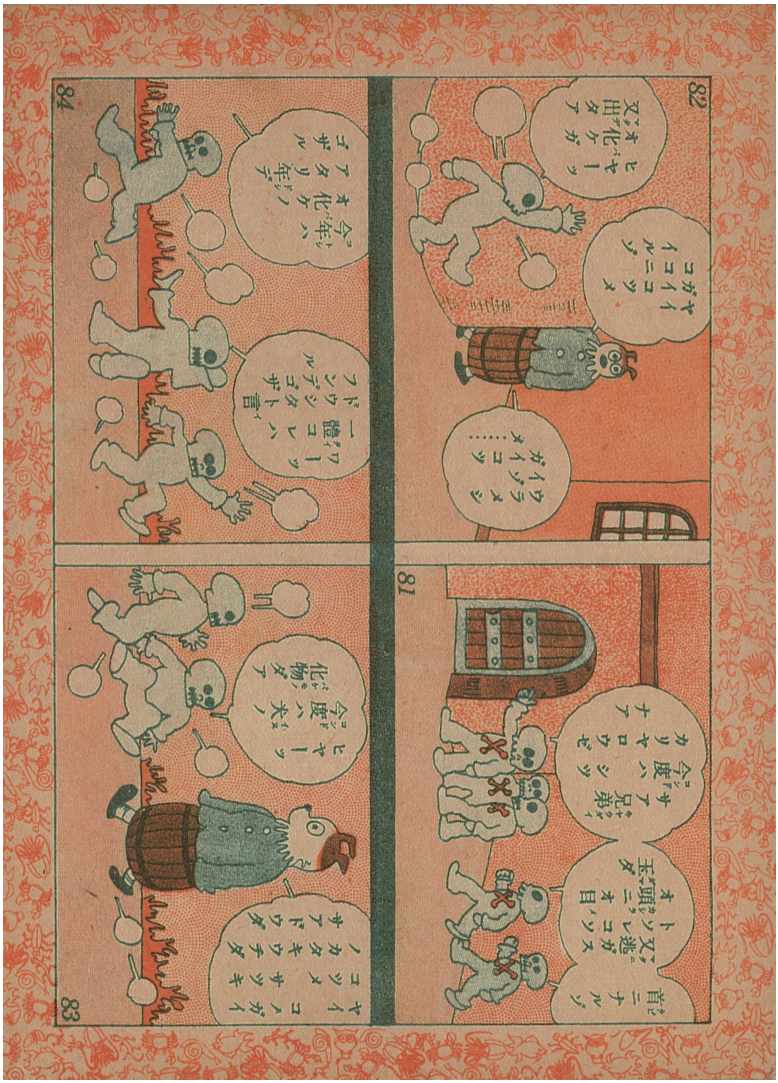

62
モウダメダ
ナムアミダ
ブツアーメン
ソーメン
63
オヤ袋ノ中ヘ
落チタゾ
64
ワーッ
パラシユートノ
替リトハスバラシイ

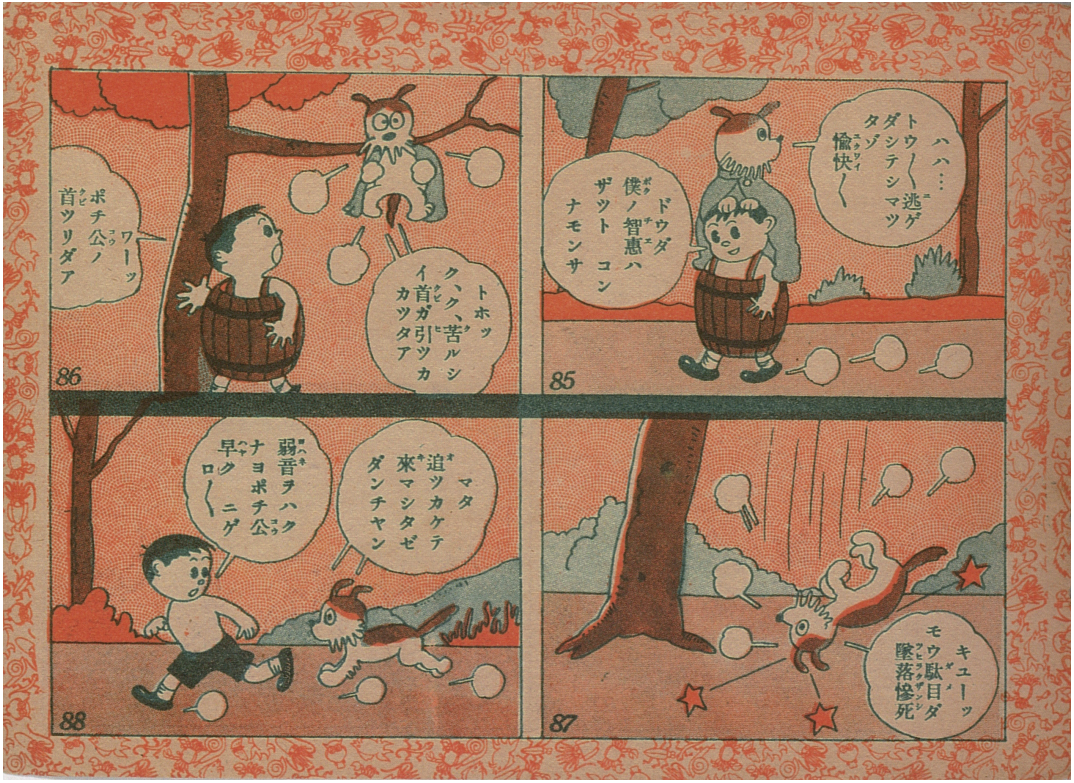

65
ヤ命ビット
ロ早ウ家ノ
ロ家ヘイテ
66
ハカレ家ヲ
公衆電話デ惡漢
キヘンヨウセ
67
ルノ化物ガイ
ジメ〜
68
ナレバコウ
ノモノサッチ
ジメ〜
生捕ッタゾ
ヤット


サア オ化ケヲ ツカマヘタゾ 早ク オ頭ヘ ミセロ
パン ザーイ ソレ イソゲ
69
ヤヤッ 怪シイ奴ガ公衆 電話ヲカツイデ 行クゾ
70
イデヤ 追跡イタ シテクレ ーン
71
ドウモ コノ 化物ハニガ テダツタヨ
コレデ ワレワレモ 枕ヲタタクシ テ寝ラレルト イフモノダ
サア コノ中ヘ ホウリ込メッ

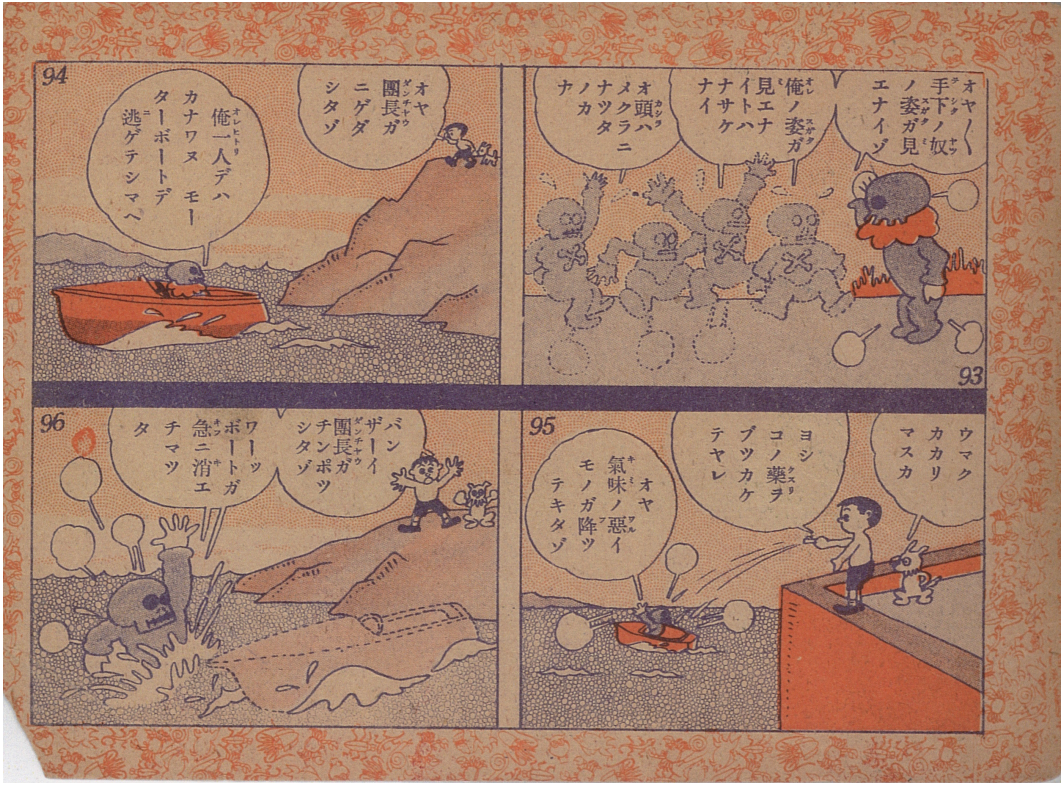

74
飛ヒ込ンデヤレ
コノヨ中カラ
75
オイテロッ
ヤイ
ドッ
ジ
我輩ヲ呼ンデ
一體何者ダ
何ニサガシ
テイルダイ
オイボチ公
モ姿ハ見エ
ズ……ソレト
76
公オイボチ
ソノ僕ヨ……
ダッ化ケヤー
ヒヤー
目ー目


77
待ツテ オイデ デハコノ薬ヲ呑ムト ショウ
ドウモ オク病ナ ポチ公ダナア
ドウダン チヤンラ シイガ 怪シイゾ
78
一體コノ寒イノニ ハダカデドウシタンデス
惡漢カラ貰ツタ着物ナンカ捨テチマツタンダ
ドウダ ポチ公姿ガ見エルカ
79
成程ソレハ妙案面白イデスナア
惡漢ガ キタラムニヤ〜ゴニヨ〜
キツト 奴等ハ驚キマスゼ
80
キツト 小僧ヲツレテキマス
サア 今度ハ逃ガサヌヤウニスルンダ
モウ逃ガサンゾ


82
ヒヤーッ
又出タア
コガイコイルニッメ
ウイゾメ……
ガイコッ
81
カリヤロウゼ
今度ハ兄弟サア
オ頭ニオ目
又逃ガス
首ニナルゾ
83
ヒヤーッ
今度ハ犬ノ化物ダア
ノカタキウチダ
コノガイ
ヤイ
ゴザル
今年ハ化ケノ年デ
一體コレハ
フドウジンデゴタト言ヒ
ワルーッ
84


ハハ…
トウ〜逃ゲダシテシマツタゾ
愉快〜
85
ドウダ
僕ノ智恵ハ
ザット コンナモンサ
トホッ
ク、ク、苦ルシイ
首ガ引ツカカツタア
86
ワーッ
ポチ公ノ
首ツリダア
キューッ
モウ駄目ダ
墜落怪死
87
マタ
追ツカケテ
來マシタゼ
ダンチヤン
弱音ヲハク
ナヨポチ公
早ク ニゲロ〜
88


キヤツコマツダテニ
ジハアノドゴカ僧ザワニ
ツヨモザタ心細ルデ拙ナ者
ベルブモ變ロジツノナ
ペンカツロ
ダイマスンテ
呑ンロ
早ク登ツテ公ポチヨ
オイ上ルンデ木ノ僧ガ兄弟小
ゴトル消ヤレエ中ムノ打ツ業ヲ麥ヲ入ヘ
コ成程面白イツ


93
オヤ〳〵手下ノ奴ノ姿ガ見エナイゾ
俺ノ姿ガ見エナイトハナサケナイ
オ頭ハメクラニナツタノカナ
94
オヤ團長ガニゲダシタゾ
俺一人デハカナワヌモーターボートデ逃ゲテシマヘ
95
ウマクカカリマスカ
ヨシコノ藥ヲブツカケテヤレ
オヤ氣味ノ惡イモノガ降ツテキタゾ
96
パンザーイ團長ガチンポツシタゾ
ワーツボートガ急ニ消エチマツタ

